

共産圏諸国の穀物需給について

丸 毛 忍

東欧から極東にわたる共産圏諸国は今日世界最大の穀物輸入

地域となっている。これは世界の穀物貿易の歴史において画期的な事件といっていだろう。ことに、中国の一九六〇年以後、

ソ連の一九六三年以後の穀物輸入——主として小麦——の急激

な増大は、この地域の長期的な穀物不足の様相を明らかにした。

共産圏の穀倉ソ連が輸出国から輸入国に転じたことの影響は極

めて深刻である。アメリカ農務省の予測にしたがえば、「一九

六五・六六穀物年度における自由世界の共産圏への穀物輸出総

計は、一九六三・六四年度の七億ブッシェル(約一、九〇四万

トン)に近いだろう」という。もはや、中国、ソ連の輸入を抜

きにしては世界穀物市場の動きは考えられないくらいだ。

《ノート》 共産圏諸国の穀物需給について

「共産圏の穀物不足がこのように急に顕在化したのは何故か」。この問題と関連して、社会主義農業経営方式の非有効性を云々する人もあるが、輸入の急増という事実以外には、穀物不足の理由はもちろん、その実体もまだほとんどわかっていないようである。

このノートは、共産圏諸国の近年の穀物需給を統計的に一応跡づけようと試みたものである。穀物別の数字、消費関係の数字がほとんど得られず、はなはだ意に満たないものとなったが、差当りの資料入手状況ではこの程度で我慢するほかはない。なお、今回は、ソ連・東欧が中心となり、中国については断片的にふれるにとどまった。

注(一) USDA, *Foreign agriculture*, Oct. 18, 1965, p. 4.

ソ連は何故穀物輸入国となったか

たとえば、一九五八年から六二年までの間に、年々四三〇万ないし七四〇万トンの穀物輸出余剰(露庄産—露ソ産)をもったソ連が、六三年の凶作を転機として、何故急に穀物輸入国に変わってしまったのか。近年におけるソ連の穀物および小麦の需給状態の概略を示した第一表をみて、その間の事情は一向にわがみがたい。

この問題を説明するには、少なくとも次の三つの点を確認め

第1表 穀物および小麦の需給 (播熟期とうもろこしをのぞく)

項目	単位	1953	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965
(穀物) 播種面積	100万ha	106.7	121.4	114.5	115.5	122.4	128.6	129.9	133.3	
収 量	1ha当り ツェントネル	7.8	11.1	10.4	10.9	10.7	10.9	8.3	11.3	
生産高	100万トン	82.5	134.7	119.5	125.5	130.8	140.2	107.5	151.1	120.5⑩
国家調達量	〃	31.1	56.6	46.6	46.7	52.1	56.6	44.8	68.3	55.6⑩
輸 出 量	〃	4.5⑥	5.0	7.0	6.7	7.4	7.8	6.2	3.5	
輸 入 量	〃		0.7	0.2	0.2	0.6	0.4	3.1	7.2	
(小麦) 播種面積	100万ha	48.3	66.6	62.9	60.3	63.0	67.4	64.6	67.9	70.0⑩
うち 冬小麦	〃	17.8	18.2	17.4	12.1	17.2	18.1	16.3		
うち 春小麦	〃	30.5	48.8	45.5	48.3	45.7	49.2	48.2		
収 量	1ha当り ツェントネル	11.1	16.2	15.2	15.1	16.9	16.8		13.8	
うち 冬小麦	〃	7.0	9.7	9.4	9.5	8.2	8.2		9.8	
うち 春小麦	〃	41.3	76.6	69.1	64.3	66.5	70.8	52.0⑩	74.2	
生産量	100万トン	19.2	41.9	34.2	30.7	33.3	34.6		38.7	60.0⑩
国家調達量	〃		3.8	6.0	5.6	4.8	4.7	4.1	2.0	
輸 出 量	〃		0.3	0.2	0.2	0.6	0.4	3.0	7.2	
輸 入 量	〃									

出所: Народное хозяйство СССР в 1962 году, в 1963 году. Внешняя торговля СССР за 1959~1963, за 1964.

① 目標数字, ② 1965年上半期実績, ③ 西側概測, ライ麦を含む, ④ 西側概測, ⑤ 1952年の数字, ⑥ 1965年国民経済実績.

ばならないだろう。

(一) これまでの生産統計に水増しがなかったか。

(二) ストックを含む、穀物の主要使途別需要量。とくに、一

九六〇年代に入って、穀物需要量を急増させるような事情が発生しなかったかどうか。

(三) ソ連の穀物輸入量中、他の共産圏に再輸出されるものはどれくらいあるか。

だが、もちろん、ソ連の文献にそのような数字を期待するわけにはいかない。まず第一～四表を検討して、いくらかでもこれらの問題に接近してみよう。

穀物生産をみると、第一表のとおり、一九五三年から五八年までの間に、播種面積が一、五〇〇万ヘクタール近くふえ、収量もヘクタール当り三ツエントネル以上上昇しており、それらの増大は小麦において特に著しい。が、その後は播種面積、収量ともむしろ横ばいで、穀物生産には、豊作であった一九六四年をのぞけば、顕著な増大はみられない。五八、六二、六四年の豊作と五九、六三、六五年の凶作とが交錯し、年次による増減の幅が大きく、穀物生産は安定してない感じである。たとえば、一九五三～六四年の平均収量は九・六五ツエントネル(ツエントネルは〇・一トン)、最高は六四年の一・三ツエントネル、最低は五四年の七・七ツエントネル(第一表には五四年の数字

第2表 穀物生産の分布(蠟熟期とうもろこしをのぞく) (単位: %)

項 目	1913	1940	1949~53 平 均	1954~58 平 均	1959~63 平 均
非 黒 土	20.3	19.0	15.0	10.2	9.5
ウクライナ, モルダヴィア	29.2	29.4	28.6	23.6	22.3
中央黒土, 北カフカース	18.2	16.1	16.7	16.5	17.4
沿ヴォルガ, ウラル	20.8	21.7	20.4	18.0	23.2
シベリヤ	5.6	8.1	10.7	16.3	12.6
カザフ	2.5	2.6	4.9	12.6	12.6
ザカフカース, 中央アジア	3.4	3.1	3.7	2.8	2.4
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所: Г. Котов, "Увеличить производство зерна и повысить его рентабельность". Экономика сельского хозяйства No.6. 1965. стр. 38.

は表示してないので、五三年の七・ハツエントネルが最低になって(いる)であつた。したがって、平均収量からの偏差は上限一七%、下限二〇%、最高収量は最低収量より四七%高いことになる。

第二表をみると、一九五三～五

第3表 ソ連の穀物商品化

年度 (平均)	殺 物 商 品 生 産 高			殺 物 国 家 飼 込 高		
	100万トン	対殺物収獲高 (%)	対1909 ～ 1913 (%)	100万トン	対商品生産高 (%)	対殺物収獲高 (%)
1949 ～ 1953	37.9	46.8	218	32.8	86.5	40.5
1954 ～ 1958	49.0	44.3	281	43.5	88.8	39.4
1959 ～ 1963	55.1	44.2	316	49.4	89.7	39.6
1964	74.1	49.0	425	71.8	97.0	47.5

Цуф: Г. Котов, "Увеличить производство зерна и повысить его рентабельность", Экономика сельского хозяйства, No. 6, 1965, стр. 36.

八年の穀物生産の増大が、フルシチョフ首相の実施した沿ヴォルガ、ウラル、シベリア、カザフスタンの処女地開発の賜物であつたことが判明する。この四地方の穀物生産を合計すると一九五九〜六三年平均では全体の半分に達し、穀物生産の中心は国の東部に移動したことになる。同時に、旧開地の穀物生産は次第に適地に集中される傾向を生じ、穀物収量の上昇がみられた。

処女地開墾によつて増加したのは主として春小麦であり、穀物生産は収量の高い地域から低い地域に向つて拡大されていつたわけだが、新しい開拓地のなかには、寒冷で雨量の乏しい限界地がかなり含まれており、ソ連の穀物生産、ことに小麦生産

を一層不安定なものにしてしまった。一九六三年や六五年の東部地方、なかでもカザフスタンの旱ばつが凶作の大きな原因となったことは、今では周知の事実である。

穀物の調達量は一九五八年には五三年にくらべて、約二、五〇〇万トンふえているが、その後は六四年をのぞけば、むしろ減っており、ことに小麦は一度も五八年の水準に達していない。ブレジネフ共産党第一書記によれば「最近十年間のうちで、穀物調達量が計画目標に達したのは、一九五六、五八、六四の三年だけだ」という。

フルシチョフ時代に、穀物の買付ないし引渡し（後者はソフホーズの場合）価格は平均して、一九五二年から六二年までの

間に八・四倍に引上げられたが、当時の価格ではなおコストを割るか、収益の非常に少ないコルホーズ、ソフホーズが多数であった。プレジネフ共産党第一書記は、穀物の生産量、調達量の増加しない原因の一つが現行の調達制度にあるとみて、一九六五年から国家のコルホーズからの買付価格を小麦一二%、ライ麦二三%、ソフホーズからのそれを小麦二五%、ライ麦三二%引上げ、かつ、同年の穀物調達目標を六、五五二万トンから五、五六九万トンに一、〇〇〇万トン近く削減、かつ、この目標を一九七〇年まで六年間すえおくことにし、計画以上の国家への販売にたいしては五〇%のボーナスをつけ、計画からはずした一、〇〇〇万トン内外の穀物は今後より高い値段で買付けるといふ、農民の増産意欲を経済的に刺激する政策を打ち出した。

ただし、一九六五年の穀物価格の引き上げがコルホーズ、ソフホーズに充分の収益を保証するものであるかどうかは、今のところ検討すべき材料がないし、計画超過買付は六五年は凶作であったため、もっぱら輸入に振り替えられたとみられる。したがって、上記の政策の効果は今のところまだはつきりとは判定できない。

第三表にみるとおり、ソ連の穀物の商品化率はまだ五〇%に達せず、コルホーズ、ソフホーズのような大規模経営だけしか

第4表 ソ連の人口と家畜数（各年1月1日現在）

（単位：100万）

	1954	1959	1960	1961	1962	1963	1964
人 口	191.0	202.8	212.3	216.1	219.7	223.1	226.3
家畜（家畜単位）	89.2	105.6	110.3	111.5	119.3	124.7	95.8

出所：Народное хозяйство СССР в 1963 году, стр.8, 311.

注：人口および家畜数は1月1日現在の数字であるから、他の指標と比較する場合は後者の前年の数字と比較した方がよい。

家畜数は牛1.0、馬1.0、豚0.2、羊0.1、山羊0.1として家畜単位に換算したもの。

ないことを考えれば、きわめて低いというよりない。大量の自給飼料穀物部分が商品化量のなかにはいつていないにしても。

穀物の用途別需要量は不明だが、第四表にしたがえば、ソ連の人口と家畜頭数との増加は穀物生産の増加を上廻るほどのものではない。人口一人当りの穀物生産高は、種子量を差引いて計算すると、一九五四〜五八年平均四・三五ツェントネル、一九五九〜六三年平均四・六五ツェントネル、一九六四年四・五五ツェントネルとなり、漸増の方向にあるのは事実だ。なおソ連のヘクタール当り平均穀物播種量は、一・八ツェン

トネルであり、一トン強の收穫量にたいして非常に多い。

だが、一人当り穀物消費量、とくに小麦消費量はかなり増加しているはずだし、家畜一単位当りの飼料穀物消費量も、家畜能力の向上にともない、急速に増大しているはずとみられる。

これらの点を考え合せると、実際の穀物需要量の増大はたんなる人口や家畜数の増大以上のものがあるに違いない。人口一人当りの穀物生産量が増加しているからといって、問題が解決されているわけではあるまい。

濃厚飼料（主として飼料穀物）の消費量は、一九五三年三三〇万トン、五八年七二〇万トン、六〇年五、三七〇万トン、六二年六、一四〇万トンという風に増加しているが、六三年には凶作で減り、五、二三〇万トンとなり、まだまだかなり不足している。だけど、飼料穀物は小麦のように大量輸入というわけにいかないから、その影響は家畜屠殺数の一時的増大、翌年の家畜頭数の減少という形態で現われる。まず第一に、フルシチョフ前首相が奨励したが、どうも効率の悪い青刈とうもろこしの作付を、速やかに他の飼料穀物に切り変えることが急務だろう。

ソ連の穀物ストック——恐らく軍事ストックを含む——の大きさは、むろんわからない。

ソ連は、一九六三年以来、大量の小麦を輸入しているというが、第一表によれば、六三年は穀物輸出六二〇万トン、輸入三

一〇万トンで、なお三一〇万トンの余剰があり、六四年は穀物輸出三五〇万トン、輸入七二〇万トンで、はじめて差引三七〇万トンの純輸入国、穀物不足国となっている。⁽³⁾

最後に、穀物生産についてのソ連公表数字をそのまま鵜呑みしていいかどうかという問題がある。ソ連の穀物収量の計算方式は、一九五三年以前の坪刈を基礎とし、その後のロスを全く見込まない「生物学的収量」から、実際に倉庫に収納される量に基礎をおくものに変ったはずであった。ところが、「現在使用されているものは、コンバインから出てきたままの穀物の重量で、ごみ、もみがら、過度の水分を含んでおり、その量は全体の一五％に達する。雑物や余分の水分を含む重量を規程として、コンバインの運転手や作業隊員のボーナスを出すのは適当でない」と、現在の穀物生産量に水増しのあることを認める議論が最近公然と行なわれている。

一〇〜一五％の過大評価をヘクタール当り一・二ツェントネルとみるなら、ソ連の穀物播種面積は六四年一億三、三三〇万ヘクタールだから、集計すると一、三三三万トンないし二、六六六万トンという大きな穀物量に達する。ソ連の穀物生産をみる場合、このような事実を見落すわけにはいかない。早ばつ年であった一九六二年の穀物生産量についての公表数字を、筆者を含めて当時モスクワにいた西側専門家は、実感としてかなり

第5表 コメコン諸国の穀物生産

(1950年=100)

国 名	品 目	1955	1958	1959	1960	1961	1962
ブルガリア	穀 物	134.8	124.6	155.5	155.4	139.2	141.1
	うち 食糧	103.9	120.2	125.7	122.1	104.9	105.2
	飼料	191.5	132.6	209.7	212.8	203.6	206.0
ハンガリー	穀 物	120.7	103.4	133.7	125.4	111.8	124.7
	うち 食糧	93.7	65.1	82.4	74.3	78.2	77.7
	飼料	150.7	145.4	190.4	182.1	148.9	176.7
東 ド イ ツ	穀 物	102.4	102.0	96.7	102.9	76.3	92.3
	うち 食糧	103.1	108.5	101.7	104.0	73.8	88.3
	飼料	101.8	92.3	89.1	101.1	80.0	98.5
ポーランド	穀 物	110.3	117.0	122.0	123.3	134.5	124.6
	うち 食糧	109.1	115.2	126.5	121.9	133.0	112.2
	飼料	113.6	121.8	110.4	126.9	135.3	125.9
ルーマニア	穀 物	193.7	141.8	216.8	191.1	206.9	188.8
	うち 食糧	134.1	126.9	171.9	147.9	170.5	171.9
	飼料	274.2	155.5	237.9	229.6	239.3	203.7
ソ 連	穀 物	129.9	171.8	133.6	157.9	163.3	169.5
	うち 食糧	130.0	188.2	175.4	164.4	169.6	179.0
	飼料	129.8	140.6	112.5	145.5	151.3	156.5
チエコスロ ヴァキア	穀 物	108.2	102.3	116.8	121.3	119.9	120.5
	うち 食糧	94.7	88.5	101.5	93.1	103.3	99.3
	飼料	123.9	118.9	133.3	155.6	139.6	145.9

出所：Международный сельскохозяйственный журнал No.1, 1965, стр.5.

水増しされたものと判断していたが、上記の統計処理上の過大評価は筆者たちの実感を裏づけるにたるものであろう。六三年からソ連は急に大量の小麦を輸入するようになった。

ソ連の穀物生産を他国と比較する場合は、少なくとも一〇～一五％は差引いて計算しないと正確でないであらう。だが穀物生産統計に水増しがあるとしても、穀物消費についてのデータが得られないので、結局「ソ連が何故穀物輸入国になったか」を検証するのはむずかしい。

注(一) И. И. Брекнев,

О неогложных мерах

по дальнейшему развитию сельского хозяйства СССР, 27 марта 1965.

第5表 北極圏諸国の穀物生産

機	前	1955—59平均		1962		1963		1964	
		面積 (1,000ha)	生産 (1,000ト)	面積 (1,000ha)	生産 (1,000ト)	面積 (1,000ha)	生産 (1,000ト)	面積 (1,000ha)	生産 (1,000ト)
ポーランド	(1938)	(1934—38) (平均)							
	小麦	1,754	1,963	1,449	2,276	1,393	2,700	1,542	3,067
	ライ麦	5,895	6,851	5,079	7,288	4,700	6,685	4,383	7,124
	大麦	1,178	1,633	752	1,170	663	1,315	749	1,479
東ドイツ	小麦	2,277	2,832	1,674	2,448	1,584	2,714	1,682	2,830
	(1934—38平均)								
	小麦	613	1,547	415	1,183	423	1,236	426	1,203
	ライ麦	1,169	2,070	1,110	2,137	811	1,623	820	1,574
チェコスロヴァキア	小麦	445	1,024	334	870	374	1,094	423	1,107
	ライ麦	708		455	1,050	372	990	315	758
	(1934—38平均)								
	小麦	882	1,513	729	1,507	673	1,644	720	1,766
フィンランド	小麦	983	1,577	504	974	441	916	426	880
	ライ麦	653	1,109	664	1,345	694	1,752	692	1,620
	大麦	748	1,212	523	941	448	905	409	797
	とうもろこし	105	225	176	443	237	471	213	578
ハンガリー	(1931—40平均)								
	小麦	1,606	2,196	1,260	1,866	1,095	1,959	976	1,523
	ライ麦	634	712	408	468	232	233	209	215
スウェーデン	小麦								
	ライ麦								
	大麦								
	とうもろこし								

大	麦	464	628	474	846	548	1,144	486	869	525	820
燕	麦	231	286	141	212	84	115	90	106	74	65
とうもろこし		1,167	2,185	1,292	2,914	1,288	3,241	1,289	3,551	1,212	3,200
ルーマニア		(1934—38平均)									
小	麦	2,563	2,630	2,954	3,212	3,043	4,054	2,874	3,791	2,960	3,800
ラ	麦	179	165	158	151	77	75	80	78	70	70
大	麦	839	602	315	381	251	419	222	350	215	300
燕	麦	674	528	339	327	173	167	131	130	110	100
とうもろこし		3,884	4,056	3,551	5,097	3,107	4,932	3,371	5,964	3,565	6,500
ブルガリア		(1939)									
小	麦	1,527	2,003	1,402	2,156	1,244	2,081	1,240	1,886	1,270	2,030
ラ	麦	231	257	129	129	59	49	60	48	60	50
大	麦	276	414	265	459	303	599	300	540	310	620
燕	麦	145	149	164	176	152	114	150	145	145	154
とうもろこし		787	1,076	745	1,283	651	1,556	655	1,802	675	1,850
ユーゴスラビア		(1930—39平均)									
小	麦	2,140	2,430	1,922	2,742	2,130	3,265	2,140	3,950	2,100	3,700
ラ	麦	250	212	254	251	177	169	157	156	150	150
大	麦	424⑥	407⑥	373	476	351	475	350	524	350	560
燕	麦	364⑥	317⑥	356	350	310	305	315	345	320	350
とうもろこし		2,600	4,300	2,520	4,710	2,460	5,270	2,410	5,380	2,430	6,500

出所：戦前は L. H. Tolkuynov. Социалистический жатверь, 1962. FAO, Yearbook of Agricultural Statistics. ① 戦前は 1934—38平均, 1955—1964は USDA, The 1965 Eastern Europe Agricultural Situation. 1964年は推定

(2) この人口一人当り穀物生産高は種子量を引いているので、第七表とは一致しない。

(3) ソ連の貿易統計は通関ベースの計算であろうが、輸出側側の契約ベースの発表数字とはかなり大きな隔りがある。

(4) *Сельская жизнь*, 28 февраля 1965, *Экономическая газета*, 10 февраля 1965.

向上しない穀物自給率とソ連への依存

第五表は、コメコン諸国の一九五〇年を一〇〇とする穀物生産ののび、第六表はユーゴスラヴィアを加えた東欧諸国の戦前、および一九五五年以後の穀物生産の絶対量を示す。いずれにしても、穀物生産ののびはあまり顕著ではない。一九五〇年は一般に戦前水準より低いとみられる。だから、五〇年にくらべて生産が増加していても、必ずしも戦前水準を越えているとはいえない。

ソ連をのぞいて、各国とも穀物播種面積はほとんど増加しておらない。内容を見ると、食糧では、主として収量の関係から小麦がふえ、ライ麦が減り、飼料では、播種面積、生産とも、とうもろこしが増加し、燕麦は減っている。

東ドイツのようにまだ穀物生産全般にわたって戦前水準に回

復していない国もあるし、チエコスロヴァキア、ハンガリー、ブルガリアなども、食糧穀物に関するかぎり、戦前水準を下廻るか、これとすれすれのところにある。戦前にくらべて一番確実にのびているのはルーマニアとユーゴスラヴィアであろう。ハンガリー、チエコスロヴァキア、ブルガリア、ルーマニアは、食糧穀物より飼料の方がずっと急速にのびている。ポーランドは、食糧穀物が増加するようにみえるが、小麦の二五%、ライ麦の四五%は飼料にまわり、ルーマニアではとうもろこしの一部はママリガという一種のパンの形で消費されていることをみすごしてはならぬ。飼料穀物のより急速な増加が畜産の発展に寄与することはいうまでもないが、これらの増産部分は今のところ、主として養豚と養鶏に向けられているようである。

第七表によつて、コメコン諸国の一九五〇年から六二年にいたる、人口一人当り穀物生産の動きをみよう。年々の穀物生産の増大が人口の増大に追いついているのは、ソ連、ルーマニア、ブルガリア、ポーランドの四国だけで、他国の穀物生産は人口増加から著しく立遅れている。ただし、飼料の人口一人当り生産は概して増大傾向にあるといつてよい。

第八表はコメコン諸国の穀物輸出入バランスを示すが、東ドイツ、チエコスロヴァキア、ポーランド、それに量は少ないが、ハンガリー、ブルガリアの五カ国は穀物を輸入している。この

第7表 コメコン諸国の人口1人当り穀物生産量

(単位:kg)

国名	品目	1950	1955	1958	1959	1960	1961	1962
ブルガリア	穀物 うち食糧	430 278	560 279	503 314	621 325	611 313	544 263	547 265
ハンガリー	穀物 うち食糧	584 307	671 274	569 188	731 237	683 212	604 222	672 220
東ドイツ	穀物 うち食糧	313 189	326 198	335 215	319 202	340 208	255 149	307 177
ポーランド	穀物 うち食糧	463 335	473 332	468 333	480 359	480 342	515 371	474 308
ルーマニア	穀物 うち食糧	315 148	572 185	401 168	580 226	331 193	568 220	514 220
ソ連	穀物 うち食糧		493 322	617 442	543 405	548 373	557 378	576 393
チェコスロヴァキア	穀物 うち食糧	379 207	388 185	357 169	405 192	419 175	400 194	409 184

出所: Международный сельскохозяйственный журнал, No. 1, 1965, стр. 6.

穀物輸入はたえず増大する傾向にあり、食糧穀物がその六〇〜八〇%をしめている。輸入への依存度は東ドイツとチェコスロヴァキアでは三〇%内外、ハンガリー、ポーランドでは一〇〜一五%に達する。

穀物輸出国はソ連とルーマニアの両国だけである。共産國の穀倉ソ連からの穀物輸出は、コメコン諸国の穀物不足を全部カバーするわけにはいかないが、とくに東ドイツ、チェコスロヴァキアの穀物輸入におけるソ連の地位は圧倒的に大きい。だが、そのソ連も一九六三年以後は穀物輸入国ないし東欧への再輸出国のごとき様相を呈するようになった。

コメコン執行委員会は一九六一年一月「穀物をできるだけ増産せよとの課題」を提起したが、その後も穀物の自給率はほとんど向上しておらない。消費量の増大もあるが、恐らく穀物自給率は戦前以下ではないかとみられる。穀物の増産はまず播種面積拡大の可能性如何にかかると、現在コメコン諸国の播種面積中に穀物のしめる割合は相当に大きく、一九六二年の状態は第九表のとおりであり、ソ連のほかはフロンテャーも少なく、拡大の可能性に乏しい。そのソ連も一九五八年以後小麦の播種面積がほとんどかわっていないのは第一表にみたのとおりである。また、コメコン諸国ではまだ一般に農業人口の総人口中にしめる比率が高く、農業就業者一人当りの農地はごく小さいので、

第8表 コメコン諸国の穀物飼料バランスにおける穀物輸出入の割合 (単位: %)

国名	品目	1950	1955	1958	1959	1960	1961	1962
ブルガリア	食糧	+ 2.6	+ 0.1	- 0.8	- 6.0	- 4.0	+ 0.1	- 5.9
	飼料	+ 1.9	+ 0.4	+ 1.7	- 3.4	+ 5.7	- 0.2	+ 0.2
	穀物全体	+ 0.9	+ 2.5	+ 0.2	- 4.9	+ 0.5	- 0.1	- 2.5
ハンガリー	食糧	+14.2	- 2.3	- 2.3	- 8.4	-11.5	-15.8	- 6.0
	飼料	+ 0.2	+ 3.9	- 1.6	- 0.5	- 0.6	- 3.2	- 9.5
	穀物全体	+ 7.1	- 0.9	- 1.8	- 3.2	- 4.3	- 8.3	- 8.4
東ドイツ	食糧	- 5.1	-16.8	-27.9	-26.6	-29.4	-33.1	-33.7
	飼料	-11.4	-20.6	-14.0	-11.2	-11.2	-17.2	-20.7
	穀物全体	- 7.7	-18.3	-23.5	-21.7	-23.4	-27.3	-28.7
ポーランド	食糧	- 1.4	-11.2	- 8.3	-11.0	-15.0	-15.5	-15.7
	飼料	- 2.4	+ 0.1	+ 1.5	- 8.9	- 4.6	- 5.8	- 8.7
	穀物全体	- 1.8	- 8.3	- 5.7	-10.5	-12.3	-13.0	-13.7
ルーマニア	食糧	+ 2.0	- 7.8	- 6.0	+ 0.1	- 1.7	- 5.2	+ 0.9
	飼料	+ 7.6	+ 8.1	+12.6	+ 3.5	+ 9.9	+17.8	+19.3
	穀物全体	+ 4.9	+ 2.4	+ 4.0	+ 2.1	+ 5.4	+ 7.7	+11.0
ソ連	食糧	+ 2.7	+ 4.4	+ 4.5	+ 8.0	+ 8.3	+ 6.7	+ 6.9
	飼料	+ 5.5	+ 2.0	+ 0.8	+ 1.4	+ 0.9	+ 4.1	+ 4.3
	穀物全体	+ 3.7	+ 3.6	+ 3.6	+ 6.2	+ 5.8	+ 5.9	+ 6.0
チェコスロヴァキア	食糧	-16.2	-26.9	-30.1	-40.0	-40.0	-32.9	-25.8
	飼料	- 1.6	-14.7	+11.3	- 2.7	- 8.1	- 6.3	-11.5
	穀物全体	-10.1	-20.9	-26.3	-24.9	-25.1	-21.1	-18.5

出所: Международный сельскохозяйственный журнал, No. 1, 1965, стр. 7.

≪ノート≫
 共産圏諸国の穀物需給について

二二二

ヘクター当たり所得水準の大きさが重要な意味をもつが、現在のような粗放なやり方では、穀物一ヘクター当たりの所得水準は、じゃがいも、野菜、工芸作物の栽培をした場合にくらべ、ずっと低くなる。穀物増産のむずかしい理由の一つがここに見出される。

ソ連以外の諸国では、播種面積を拡大する可能性は限られているので、穀物の収量を引上げるか、現在栽培されているものより収量の高い穀物を導入する方策が必要だろう。

コメコン諸国の穀物収量の動きは第一〇表のとおりであり、一九五〇年から六二年までの間に、ライ麦をのぞけば、収量はかなり増大しているが、東ドイツ、チェコスロヴァキア以外は

第9表 穀物の総播種面積中の割合 (1962年)

ブルガリア	61.3%
ハンガリー	63.2
東ドイツ	42.1
ポーランド	54.8
ルーマニア	68.9
ソ連	53.1
チェコスロヴァキア	48.7

出所：Международный
Сельскохозяйствен-
ный журнал, No. 1
1965, стр. 7.

まだまだ非常に低くて、西欧諸国の二分の一ないし三分の一の水灌である。したがって、今後の収量増大は可能性としてはか

なり大きく、肥料の増投が問題になるものとみられる。ハンガリーは、一九六〇年の播種面積と消費水準で考えて、ヘクタール当り収量を二、三セントネル引上げれば、輸入穀物への依存をたきることができらうという。ただし、東ドイツやチェコスロヴァキアはすでに西欧水準にあり、今後さらに収量を引上げることは容易ではない。これらの国にとって、畜産をのばすにも、飼料穀物を自国で増産するより輸入した方が有利であらう。

第10表 コメコン諸国の穀物収量

(単位：ヘクタール当りツェントナリ)

国名	小 麦		ライ麦		大 麦		燕 麥		粟とリとうもろこし					
	1950～1954	1957～1961	1950～1954	1957～1961	1950～1954	1957～1961	1950～1954	1957～1961	1950～1954	1957～1961				
ブルガリア	①14.6	16.9	①10.8	10.1	①15.1	19.5	①10.3	11.7	7.4	①10.7	19.2	23.7		
ハンガリー	14.6	15.9	12.0	11.5	①10.0	14.9	19.4	20.9	11.5	13.7	18.9	23.4		
東ドイツ	28.6	30.9	31.1	21.0	②21.4	25.7	27.9	31.1	24.9	24.9	28.3	—		
ポーランド	12.3	17.2	19.3	11.9	①14.3	13.1	17.5	19.5	12.8	16.0	17.2	—		
ルーマニア	10.9	12.5	13.3	10.2	③9.9	9.5	14.3	16.7	8.2	10.3	9.6	10.6		
ソ連	②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	10.5	③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	9.4	③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	12.0	③7.2	8.9	8.2	③12.7	19.3	22.1
チェコスロヴァキア	①18.9	22.2	①17.0	19.9	②20.8	①17.9	21.6	25.2	①16.1	18.7	20.2	②21.7	27.4	19.9

出所：Международный сельскохозяйственный журнал No. 1, 1965, стр. 8.

注：①は4年平均の収量，②は秋まき作物の収量，③は1949～53年平均収量。

第11表 ソ連穀物の地域別輸出 (ひきわりをのぞく)

(単位: 1,000 トン)

国 名	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
総 量	3,682.7	3,215.2	7,413.5	5,099.6	7,008.8	6,794.6	7,480.9	7,814.3	6,259.9	3,513.5
% ①	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
オーストリア	2.0	24.6	127.3	61.7	61.3	60.2	111.3	115.0	48.8	—
イギリス	64.4	5.0	46.2	77.9	135.2	253.3	843.7	412.5	276.3	—
ベルギー	12.0	56.9	64.5	20.4	29.9	58.6	96.0	34.4	26.2	1.7
オランダ	34.6	225.2	120.6	145.6	353.0	211.4	247.8	122.1	121.3	12.5
デンマーク	15.7	23.0	15.3	6.8	60.7	34.2	24.1	2.8	—	—
イタリ	21.0	23.7	22.7	10.3	59.0	114.9	249.6	72.8	107.3	83.7
ノールウエー	150.6	134.9	131.1	134.0	94.3	106.7	98.3	82.5	44.0	—
西ドイツ	8.3	52.7	75.0	66.5	99.3	180.4	362.8	154.7	122.8	26.5
フィンランド	295.4	270.1	378.9	356.4	418.3	257.0	171.3	318.2	224.9	128.4
スウェーデン	54.7	18.7	16.0	72.4	115.0	97.3	94.3	101.1	109.6	—
小 計	658.7	834.8	997.6	954.0	1,426.0	1,374.0	2,229.2	1,416.1	1,081.2	252.8
%	17.8	25.9	13.4	18.7	21.0	20.2	30.7	18.1	17.2	7.2①
②	—	—	—	—	—	205.4	202.3	412.8	241.8	—
アラブ連合	—	119.6	306.0	317.3	275.4	—	—	—	—	—
スーダン	—	—	—	—	—	—	46.0	64.7	17.1	—
日本	—	—	—	—	35.5	54.5	24.3	39.2	30.8	—
小 計	—	119.6	306.0	317.3	310.9	259.9	272.6	516.7	289.7	9.4
%	—	3.7	4.1	6.2	4.4	3.8	3.6	6.6	4.6	0.3①

③									
ブルバニヤ	10.0	19.5	81.4	49.1	94.3	96.3	53.7	—	—
ブルガリヤ	56.3	9.0	172.9	22.9	140.1	134.5	4.7	107.9	149.9
ハンガリー	34.0	0.7	435.8	152.3	233.7	195.5	415.9	294.3	140.7
東ドイツ	1,116.0	837.4	1,863.7	1,747.2	1,686.0	1,848.2	1,787.3	2,185.8	1,577.4
中国	—	—	—	—	—	—	200.9	351.0	—
北朝鮮	27.1	50.0	41.0	—	40.2	59.7	290.3	50.0	50.4
キューバ	—	—	—	—	—	57.5	251.0	412.2	462.0
ポーランド	392.8	103.2	1,214.9	327.8	851.6	847.5	603.8	861.7	820.3
ルーマニア	301.8	44.2	507.5	193.1	—	101.1	—	—	—
チェコスロバキア	1,041.5	674.4	1,632.3	1,175.5	1,829.3	1,161.2	1,175.7	1,451.3	1,501.1
ユーゴスラビア	8.2	509.2	152.2	91.0	114.3	—	—	21.5	49.8
小計	1,987.8	2,247.6	6,101.7	3,758.9	4,979.5	4,501.5	4,783.3	5,735.7	4,751.6
%	53.9	69.9	82.3	73.7	71.0	66.3	63.9	73.4	75.9

出所：Внешняя торговля за 1955~1959, 1959~1963, 1964 及び計算。①は дриложение к журналу «Внешняя торговля, No. 11» за 1965 год.

一般にいつて、資本が不足してる上に収量の増大にはながい時間がかかるので、これからも東ドイツ、チェコスロヴァキア、ポーランド、ハンガリーは穀物の輸入をつづけ、ソ連、ルーマニア、ブルガリアなどは飼料消費が増加するため、穀物輸出を減さねばならないだろう。

一九六三年の凶作以後、コメコン諸国の「穀物の最大増産」「穀物自給率向上」の問題は一層クリチカルなものとなった。

とくに、共産圏の穀倉ソ連の輸出力の急激な低下は、コメコン諸国の穀物事情を困難にし、勢い資本主義諸国からの穀物買付を膨脹させ、ひいてはコメコン諸国の西側からの機械その他の資材の輸入を妨げ、後進諸国の穀物輸入にまで影響をあたえている。

一九六四年、とくに六五年の穀物生産の動向は、ソ連についての若干のデータをのぞけば、他の東欧諸国に関する情報はま

第12表 ソ連の地域別小麦輸出 (単位: 1,000 トン)

項 目	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
総 量	2,035.8	1,452.4	5,450.8	3,878.7	6,052.0	5,624.4	4,800.6	4,765.2	4,105.6	2,030.5
%	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
①										
イギリス	33.2	5.0	37.9	77.9	129.9	192.5	338.2	344.9	276.3	—
ベルギー	6.6	—	—	3.2	29.9	43.4	85.1	30.0	19.0	—
オランダ	22.4	10.3	3.9	45.8	336.9	175.1	199.1	95.5	118.3	—
イタリア	15.3	—	—	—	—	60.5	183.5	—	—	—
ノールウェー	108.7	86.9	101.2	103.9	79.6	92.3	79.6	79.3	41.0	—
西ドイツ	—	—	—	—	16.4	139.8	112.9	70.4	86.0	—
フランス	177.7	141.7	262.1	271.3	288.0	168.7	105.7	219.4	165.5	70.1
スウェーデン	—	—	13.0	41.5	72.3	54.0	32.6	41.6	67.8	—
小 計	364.9	243.9	417.6	543.6	953.0	928.3	1,136.7	881.1	773.9	70.1
%	17.8	16.8	17.7	14.0	15.7	16.5	23.7	18.5	18.8	3.5①
②										
アラブ諸国	—	—	—	—	—	205.4	202.3	412.8	241.8	—
アラブ連合	—	119.6	306.0	317.3	275.4	—	—	—	—	—
スーダン	—	—	—	—	—	—	46.0	64.7	17.1	—
日本	—	—	—	—	25.3	54.5	17.3	39.2	30.8	—
日 小 計	—	119.6	306.0	317.3	300.7	259.9	255.6	516.7	289.7	9.4
%	—	8.2	5.6	8.2	4.9	4.6	5.5	10.8	7.0	0.5①
③										
アルバニア	10.0	17.3	81.4	49.1	94.3	96.3	53.7	—	—	—

ブルガリア	17.0	9.0	172.9	22.9	140.1	132.0	4.7	93.7	149.9	93.1
ハンガリー	24.7	—	301.5	80.4	223.7	195.5	386.2	40.1	62.9	—
東ドイツ	478.2	125.1	1,097.7	1,298.1	1,366.1	1,498.9	1,227.0	1,251.2	1,069.4	684.1
中国	—	—	—	—	—	—	100.8	104.1	—	—
北朝鮮	27.1	50.0	41.0	—	40.2	59.7	240.0	50.0	50.1	—
キューバ	—	—	—	—	—	57.5	191.9	269.3	264.1	265.5
モルダヴィア	89.5	77.0	1,124.4	236.5	851.6	749.3	302.7	505.2	163.4	49.8
ルーマニア	301.5	44.2	456.2	193.1	—	101.1	—	—	—	—
チェコスロバキア	702.1	225.0	1,298.3	956.4	1,649.3	1,399.1	768.3	902.7	1,157.0	458.4
ユーゴスラビア	—	498.1	145.2	91.0	114.3	—	—	21.5	—	—
小計	1,651.1	1,045.7	4,718.1	2,927.5	4,479.6	4,281.4	3,275.3	3,237.8	2,916.8	1,961.0
%	81.0	72.0	86.6	75.5	74.0	76.0	68.2	67.9	71.0	96.1①

出所：Внешняя торговля СССР за 1955—1958, 1958—1963, 1964 年計。①は приложение к журналу 《Внешняя торговля, No. 11》 за 1965 год.

だきわめて不十分である。

第六表にもみるとおり、一九六四年の作柄は、史上最大の豊作であったソ連を別とすれば、東欧諸国はほぼ平年作だったといつてよい。例年どおりの穀物輸入を必要としたであろうことは間違いない。

一九六五年は、ソ連は豊作であった六四年にくらべて穀物生産は約三、〇〇〇万トン減っている（でも大兎作の六三年よりは一、三〇〇万トン多い）。ハンガリー、ルーマニア、ユーゴ

ーラヴィア、ブルガリアのダニユーブ河流域諸国は春の洪水のため、冬小麦はやられたが、春小麦には大きな影響はなかったという。ソ連以外の東欧諸国は概ね平年作以下だったようである。

揺れ動く穀物貿易——増加する西からの輸入

第一一表、第二一表はソ連の穀物および小麦の地域別輸出の状況を明らかにしている。近年ソ連は七〇〇万トン内外、うち、

小麦四五〇〇五五〇万トンを出して来た。それらの地域別のうちわけは、一九六二年をとると穀物全体では、①西欧向け一四一万吨、一八・一％、②後進国向け五一万吨、六・六％、③共産圏向け五七三万吨、七三・四％であり、小麦では、①西欧向け八八万吨、一八・五％、②後進国向け五一万吨、一〇・八％、共産圏向け三二七万吨、六八・二％となっている。共産圏向け輸出が圧倒的であり、全体の四分の三ないし三分の二をしめ、ソ連が文字どおり共産圏の穀倉の役目を果していることを物語っている。

共産圏向けの輸出のなかでは、東ドイツ、チェコスロヴァキア、ポーランドの三国向けがその四分の三にのぼる。東ドイツとチェコスロヴァキアは年々一〇〇万トン以上の穀物をソ連から輸入している勘定だ。したがって、ソ連の穀物輸出力の減退は、ただちに共産圏諸国の穀物需給に大きな影響をあたえざるを得ないし、必然的に資本主義諸国からの穀物輸入の増加に導くことになる。

凶作年の一九六三年にも、六二五万トンの穀物、うち、小麦四一〇万トンを輸出しており、共産圏向けが七六％および七一％をしめていた。これらは大部分一九六二年中にソ連で収穫された穀物であっただろうが、若干の外国小麦の再輸出分も含まれていたとみられる。一九六四年の穀物輸出は三五一万トン、

第13表 ソ連の小麦輸入 (単位: 1,000トン)

	総量	四大輸出国						その他	
		アメリカ	カナダ	オーストラリア	アルゼンチン	小計	%	小計	%
1963 ①	3,052.5	—	2,323.4	273.0	6.2	2,602.6	85.3	444.9	14.6
1964 ①	7,281.4	1,784.5	3,885.4	1,402.0	105.8	7,177.7	98.6	103.7	1.4
1963, 64②	12,000.0								
1964, 65②	3,000.0								
1965, 66②	9,000.0								

出所: ①は Внешняя торговля за 1964 год ②は Foreign Agriculture, Aug. 16, 1965, p. 12.

注 1) Внешняя торговля за 1963 の46頁の脚注によれば、ソ連は「1963年資本主義諸国で小麦788万トン、小麦粉穀粒換算15万6500トン、総計穀粒944.5万トンを買付けた」という。だが、この買付量と1963・64年度の実際輸入量との関係は明かでない。

2) ①のソ連の統計数字は歴年、②の Foreign Agriculture の数字は穀物年度によっており、期間の取り方が違っており、かつ①は実際輸入量であるのになし、②は買付契約量をもとにした推計とみられるが、両者の間には隔りがありすぎるように思われる。差当りの理由はよくわからない。

うち小麦二〇三万トンで、総量としては平常年の約半分に急落、共産圏向けは九二%および九六%をしめる。共産圏向けの輸出も減ったが、他の地域向けのはほとんどストップしたことになる。その大部分は恐らく六三凶作年産の穀物と外国小麦の再輸出分であったはずだ。

ソ連の小麦輸入量は一九五五～六三年の平均二八万六、〇〇〇トンにすぎなかったが、第一三表にみるとおり、一九六三年には三〇五万トン、六四年は七二八万トンと急激に増加している。うちわけを輸入先別にみると、アメリカ、カナダ、オーストラリア、アルゼンチンのいわゆる四大輸出国の割合が六三年八五%、六四年は九八%以上をしめている。ただし買付契約成立のベースで計算したらしい西側の発表した数字にしたがうと、一九六三・六四年一、二〇〇万トン、一九六四・六五年三〇〇万トン、一九六五・六六年九〇〇万トンとなり、『ソ連貿易統計集』の数字とは大きな隔りがある。後者の数字が再輸出分を含むかどうかは検討を要するものと思われる。なお、ソ連が輸入する小麦のなかには、産地の港から直接に東欧諸国の港ないしキューバに船積みされているもののある事実からも、上表のソ連輸入のうちかなりの部分が、ソ連から共産圏諸国向けに再輸出されているものと判断しても間違いないだろう。だが、その再輸出の正確な数量はわからない。外貨に乏しいコメコン

第14表 東欧諸国の小麦輸入 (単位: 1,000トン)

		ポーランド	東ドイツ	チェコ	ハンガリー①	ルーマニア②	ブルガリア	ユーゴ①	計
1955—	全 体	1,035	973	946	306③	7	81	1,078	4,426
59平均	うち、ソ連	476	873	966	126	199	72	169	2,881
1960	全 体	1,700	1,520	1,486	314	101	136	158	5,415
	うち、ソ連	749	1,489	1,399	195	101	132		4,065
1961	全 体	1,739	1,250	1,127	448	1	7	819	5,391
	うち、ソ連	302	1,227	768	386		4		2,687
1962	全 体	1,504④	1,238	927	225	0	120	781	4,795
	うち、ソ連	505	1,251	902	40		93	21	2,812
1963	全 体	1,673⑤	1,023	1,365	340			1,439	5,840
	うち、ソ連	163	1,069	1,157	63		150		2,602

出所: USDA, *The 1965 Eastern Europe Agricultural Situation*. ソ連からの輸出は Внешняя торговля СССР за 1959~1963 より計算.

①は小麦および小麦粉、②は穀物、ソ連からの輸入は小麦、③1959年、

④⑤は総輸入量よりソ連からの輸入量の方が多いが、出所が違うので、そのままにした。

諸国にたいして、自国の豊凶にかわりなく、ソ連は穀物供給の大きな責任をおわざるを得ない立場にある。

東欧諸国の小麦輸入は第一四表のとおりであり、たとえば、一九六〇年は合計五四一万吨、うちソ連からの輸入四〇六万吨、六二年はそれぞれ四七九万吨、二八一万吨、六三年はそれぞれ五八四万吨、二六〇万吨となっている。ソ連の平常年の小麦輸出総量にはば見合う大きさである。だから、ソ連が資本主義諸国や後進諸国に輸出している小麦分だけ、東欧諸国は西側から小麦を輸入してゐる勘定になる。近年ソ連の小麦輸出総量は減少傾向にあり、したがって東欧諸国のソ連小麦輸入量もまた減り、西側への依存が漸増しつつあることは事実だ。残念ながら、一九六三年のソ連の凶作以後の状況はまだよくわからない。たとえば、第一二表から計算すると、六四年のソ連の東欧諸国向け小麦は一八六万吨に減少しており、これに應じて東欧諸国の西側からの小麦輸入は恐らく急増したものと想像される。

だが、ともあれ東欧諸国の小麦輸入におけるソ連の地位は圧倒的である。なかでも、東ドイツ、チェコスロヴァキア両国はソ連小麦が輸入の九五〜一〇〇%をしめている。ユーゴスラヴィアは他の東欧諸国とは若干事情が異なるので、むしろ主として自由世界からの小麦輸入に依存しているが、ポーランドが

相当量の小麦を西側から買付けているのは注目される。

第一五表は自由世界の共産圏向け小麦輸出を示す。一九六〇・六一年度から一九六三・六四年度までの合計は一四億四、一〇〇万ブッシェル、約三、九二〇万吨に上り、年平均一、〇〇〇万吨に近い量になる。小麦輸出国のうちではカナダとオーストラリアの割合が一番大きく、全体の六二%にあたる。ことに、カナダの輸出は共産圏向け小麦の三八%をしめ、たとえば一九六三・六四年度のソ連向け小麦輸出は同年のカナダの小麦輸出総量の四〇%に上ったという。六三・六四年度以後の状態についてはまだ確実なデータがないが、自由世界の共産圏向け小麦の輸出先として大きいのが、ソ連と中国であることは変りない。本表にくらべると、ソ連の割合がずっと増大しているはずである。ただし、六五年は、オーストラリアは不作だし、アメリカはヴェトナム問題がからんでいるので、この両国からの輸出はほとんど期待されないようである。なお、ソ連および中国が自由世界から買付けている小麦の大部分は下級品とみられる。

中国は一九六四年は天候にめぐまれ、近年にない豊作であったが、六五年は早ばつのため小麦の収穫は前年よりはかなり減る見込だといわれていたし、六五年の一〇月には引続きカナダとの間に三年間で三〇〇〜五〇〇万吨の小麦を買付ける契約を結んだと伝えられる。⁽¹⁾ 中国が小麦を輸入するのは「備蓄用と

第15表 自由世界の対共産圏諸国小麦輸出 (1961~64会計年度)

(単位: 100 万ブッシェル)

項 目	ユーゴ スラヴ イ	ポーラ ン ド	ソ 連	その他 の東欧 キュー バ	中 共 ブ ロ ッ ク (アル バ ニ ア を 含 む)	合 計	輸出中 の %
米	1960・61	12	44		2	58	
	1961・62		17			17	
	1962・63	48	21			69	
	1963・64	11	41	65	12	129	
	計	71	123	65	14	273 (7.4)	19
カナダ	1960・61		2	8	13	31	54
	1961・62		16		10	75	101
	1962・63		14		4	62	80
	1963・64	7	12	208	46	40	313
	計	7	44	216	73	208 (14.9)	548 38
オーストラリア	1960・61					47	47
	1961・62					73	73
	1962・63					79	79
	1963・64			56		93	149
	計			56		292 (9.5)	348 24
アルゼンチン	1960・61						
	1961・62					3	3
	1962・63					4	4
	1963・64		1		3	36	40
	計		1		3	43 (1.1)	47 4
フランス	1960・61					1	1
	1961・62					7	7
	1962・63		12		6	34	52
	1963・64		13	5	5	8	31
	計		25	5	11	50 (2.5)	91 6
その他	1960・61	1			2	2	5
	1961・62		3		8	17	28
	1962・63	1	6		2	4	13
	1963・64	1	9	33	17	28	88
	計	3	18	33	29	51 (3.6)	134 9
自由世界	1960~64 合 計	81	211	375	130	644 (39.2)	1,441 100

出所: Foreign Agriculture, July 12, 1965, p. 16. ()内の数字はトン換算,
単位: 100万トン.

手びろく輸出してる米の代替用だ」という。実際、中国は一九六四年には約七〇万トンの米を主とし香港、マカオ、マライ、西独、ベネルックスなどの硬貨国に輸出したが、これは高い米（トン一二〇ドル）を輸出して、やすい小麦（トン七〇ドル）を輸入する方針をとっているためにすぎず、人口圧力が大きく食糧はまだ不足しており、小麦輸入は将来もかなり長期にわたってつづくとみるのが常識のようだ。

ソ連がどうして穀物輸入国に変わったかという点についても、あまりつつ込んだ考察をなし得なかったが、上にもみたとおり、豊作だった一九六四年を中にはさんで一九六三年、六五年と凶作がつづき、穀物生産は年々の豊凶の差が非常に激しい、例えば、第一表で明らかにしたとおり、一九六三年は六二年より約三、三〇〇万トン減産しているが、六四年は前年にくらべ約四、三〇〇万トン増加し、さらに六五年には六四年より約三、〇〇〇万トン減るといった状態である。これでは、凶作年には容易にストックが枯渇し、多量の外国穀物を輸入せねばならぬことになるのは無理もない。さらに共產圏諸国への穀物供給の責任を考えれば、なおさらのことである。一九六五・六六年度にもすでに九〇〇万トンの外国小麦を買付ける契約を結んだという。良好な作柄が少なくとも、三、四年はつづかないかぎり、ソ連がストックを補填し、輸出力を回復することは難事だろう。ソ

連の小麦輸入は当分つづくとみるほかはない。

注(1) *Die Welt*, 1965, oct. 30.